

「封建制・半封建制」覺書

野 木 稔 郎

(一)

「封建遺制」ということを考えるにあつて、われわれはまづ歴史的に、封建制の解明から出発しなければならぬと思う。「封建遺制」が、すくなくとも封建制の残存するものであり、また封建制という概念は当然、歴史的範疇に於て考えられねばならないと思うからである。このさわめて当然のようにも考えられることに言及しなければならぬのは、「封建制」ないし「封建的」という言葉がさわめて粗雑に使用されておると考えられ、⁽¹⁾また後述するように、「封建制」という概念の規定したいにも種々の困難な問題がふくまれているからである。

「封建遺制」が戦後、とくに問題になつたのは、日本資本主義の性格を考え、日本社会の性格を考えるに際してであつた。そして「封建遺制」究明の関心が農業における生産関係、農村における社会関係に集中せられた観があることも周知のことであろう。かつての日本資本主義論争を思いあわせてみても、なによりもまづ、独占段階における日本資本主義の下部構造として、農業生産部門がいかなる役割と意味をもち、いかなる性格をもっているかが究明せられねばならなかつたのであらう。

しかしながら、農村における「封建遺制」を考えるために、歴史的に封建制を広い角度から、包括的に考察し、封建制が歴史的な範疇に於て、考えられねばならないとするわれわれに、納得がいくような説明は、未だおこなわれて

はいないように思われる。それというのも、一つには、さきにふれたように、封建制の概念じたいの複雑さ、不明確さも、その原因の一つとなつてゐるのではないかと考えられる(3)。

ところで最近の安村欣次氏の見解の方向は(4)、いわゆる、わが国の「封建遺制」の解明のために、一つの示唆をあえてくれるように思われる。氏は「封建制」の概念を考えるにあつて、まづ「封建遺制」(5)に、あしがかりを、求められ、封建制の概念の不明確、複雑さを考察される。ついで、世界史的に、歴史の発展段階の上から、中世封建制の概念を考察される。さらに、日本における封建制の特徴をひきだされて、封建制の類型を考えておられる。氏の見解にたいする私の考えを述べながら「封建制」の概念を考察し、すすんで「封建遺制」、「半封建制」とはいかに考へべきかという問題のあしがかりともしたい。封建制を規定せんとして貧しい考察をすゝめることは多くの誤謬をおかす危険をまぬかれ得ないであらう。御叱正をおねがひしたいと思う。

註(1) べつにのべるまでもないと思うが、たとえば、大塚久雄氏「所謂『封建的』の科学的反省」(『近代化の歴史的起点』、

所収)にのべられるように、封建的という語は、科学的に反省する場合おそろしく、困難な問題をふくんでいること、また上原専緑氏「封建制度概念の多様性」「思想」一九五〇年二月四頁、等の指摘をみられたい。

註(2)(3)もちろん、各自の概念規定より説明はなされるとしても、それは、後述するような封建制概念の複雑さ不明確さの故に社会現象上のすべてを包括的に説明し何人をも満足せしめるような説明はおこなわれていないとはいえるのではないかと思う。

註(4) 安村欣次氏「封建制度の概念について」『経済学季報』二十八年十二月

註(5) 日本文学会編「封建遺制」をあしがかりとして安村氏は考察を始められているようである。

(二)

まづ、古代にもおこなわれたと考えられる「封建制度の現象」にたいし、中世封建制を歴史的にいかに位置づけ特色づけるかの問題から始めよう。

氏はいわれる。「封建制の基本的標識とされる特権的土地所有関係、すなわち経済外強制をともなう地代收取を基礎的特徴とする社会関係は果して中世社会にのみ特有のものであろうか」。それにたいして「土地所有関係を領主制であるか否かを区別せずに単に特権的なものであると見るならば」、「古代東方的オイコスにしても古典古代的奴隸制的オイコスにしても、その基礎となる土地所有および地代関係が特権的なものであつたこと、それに古代封建制と呼ばれるべき概念が形成されるであらうことは考えられてよい」と大塚久雄氏の所説のによられながら古代にも封建制度が存在したことを考えておられる。(以上、安村氏前掲論文四八頁)さらに「古代封建制と中世封建制とを共に特権的土地所有関係として捉えるならば両者の差別は前者が血縁的原理にもとづく支配を特徴とするに對し、後者はより権力的な領主支配を特徴とする点にあるといえようか。」と「古代封建制」と中世封建制との「差異」を考察される。(安村氏、四九頁)

周知のように、中世史研究の方向には、大きく分けて二つの研究系譜がある。一つは狭義の「封建制」Feudalismusとよばれる封主封臣間の、または領主封農民まで含めての従属身分関係を対象とする法制史的研究の方向であり、他は「領主制」Grundherrschaftを中心に土地制度、経営形態を対象とする社会経済史学よりの研究系譜である。この二つの研究系譜の統合がおこなわれないうちに、大きな溝をひろげてわれわれの前に横たわつてゐる。「封建制度」の理解にたいする困難の一つはここにある。「封建制度」を以て、単に政治的なもの、政治形態と考えようとしたり、または専ら経営形態もしくは生産関係の一形態として考えようとしたり、さらには法制史的側面と経済史的側面とを機械的に結合して、下部構造、上部構造の図形で割りきろうとしたりすることは一般におこなわれていることであるが、いま、かりに封建制度を法制史的に考えて、政治形態をあらわすものとするならば、たしかに「封土制非統一の統治形態」、地方割拠的な分権統治形態は決して世界史の發展段階における中世特有のものではない。中国の周代、大化の改新前のわが国上代、またホーマーの描くイリアッドやオゼッセイの世界にも地方割拠的な分権統治形態の存在は考えられよう。また古代においても、土地は主要な生産の手段であり、土地所有者が政治的權力を把握し、そのかぎり、なんらかの経済外強制を行使しえたと思われるから「特権的土地所有関係」「経済外強制をともなう地代收取」

も氏のいわれるように認められると思う。したがつて、一応、「古代封建制」の概念は考えられる。しかしこの「古代封建制」といわれるものが出現したのは、原始国家並存の状態から統一的古代国家への形成過程であると考えられるし⁽²⁾、またこの「古代封建制」は中世という歴史の發展段階に比較すると、より民族的なもの、家父長制的なものの上にたつていたと考えられる。まづこの点だけで「古代封建制」を中世封建制と、一応區別しておきたい。このことは後述するように、中世封建制の時代的特色を考える上に重要であると考えからである。即ち、行論にしたがつて示されるが、氏が「古代封建制」と中世封建制との差異を一応⁽³⁾、「血縁の原理にもとづく支配」と「より権力的な領主制支配」とに求められたことは重要である。

中世封建制の構造をその時代的特色について検討しよう。氏はいわれる「いわゆる封建的生産關係、すなわち領主による土地支配と、直接耕作農民によるその土地の單なる占有、及びその間に生ずる經濟外強制を伴なう地代收取、これが封建制の下部構造であつて、そのような領主層によつて封建的ヒエラルキーが組織され封土制非統一的統治形態が上部構造として形成されて、人的法律的關係たる恩給制が成立するとふつう考えられている。」(安村氏、五〇―五一頁)そこで氏は封建制の「上部構造」と「下部構造」とは必ずしも必然的な連関をもつていないこと、いゝかえれば、この「下部構造」があるところには、必ずそれに対応する「上部構造」があらわれるわけではないことを中国の例をひいて吟味される。(四九頁―五〇頁)さらにまた、「封建的ヒエラルキーは農奴制とは異質のものであつて、農民は封建的ヒエラルキーにはふくまれず、領主の農民にたいする支配は古代貴族の場合と同様に一方的・実力的であつた」と述べられ、「農民の間にヒエラルキー的なものが形成される場合はあつても、それは領主制支配の手段として農民の共同體關係が利用されたものと考えられる」とされて、支配關係の本質も古代と「中世とは」(引用者)一同様のものであつたと考えられる。(安村氏五〇頁)なお、つけくわえるならば、「封建的ヒエラルキーは、領主制支配を前提とするものであるが、それが農奴制と必然的結びつきを持つとはいえないし、封土制非統一的統治形態も領主制支配に特有のものではない。」(五〇頁)、以上は氏の言を引用しながら、氏の論稿の中から、中世封建制を考へるにあつた問題点をとり出し、羅列したのであるが、そこには封建制度を理解しようとする際に直面する困難

があきらかに看取されるであらう。

たしかに、氏のいわれるように封建制度の「下部構造」荘園、農奴制と「封建的ヒエラルギー」が組織されるような「封土制非統一的統治形態」「上部構造」との必然的連関は存在しないようにみえる。ヨーロッパや中国の中世において、農奴制の上に封建統治——地方割拠的な分権統治形態——はおこなわれた。しかし、中国の荘園経営における佃戸はあきらかに農奴とみらるべきものであり、農奴制度がおこなわれたと考えられるにもかかわらず、ついに、その上に「封建政治」はおこなわれなかつた。ヨーロッパにおいても、古代末期において「下部構造」は、すでに「年代的中世」⁽⁴⁾と考えられ、また大地主制度の完成下においても、農奴、隷農とは考えられない自由小農が社会構成的な比重をもつて存在したのである。⁽⁵⁾また「封建的ヒエラルギー」を構成した武士対武士（領主対領主）の關係は、本質的に自由人と自由人の關係であり、一種の双務契約ともみらるべき人格的結合であるにたいし、領主の農民にたいする關係は生産をめぐる結ばれ、武士と武士との關係が「臣従」といわれるならば、農民の領主にたいする關係は、「隷屬」といわれるにふさわしい關係であることはすでにしばしば指摘せられているところであらう。以上によつても、われわれは、封建制度をただ単に、政治形態または、経営形態、生産關係の一形態をあらわすものとするこの困難なことはほぼ了解せられるであらう。

それでは中世封建制度を歴史的に位置づけ、特色づけるためには、いかに考うべきであらうか。江頭恒治氏は封建制度を専制君主制的官僚政治、民主政治にたいする、一つの政治形態として理解される。即ち中世封建制度の特色を「個人と個人との間にむすばれた私的な主従關係」という「当時の特殊な社会組織」がそのまま、政治の機構となるような分権的政治形態と考えられた。⁽⁶⁾たしかに「武士」の主従關係という社会組織が制度化され、政治制度となることは、中世における封建制度の一性質をなす。古代国家の、国家権力の弱体化または崩壊にともなう社会的混乱に乱じ、すでに社会の普遍的現象として用意されつつあつた特殊な社会組織——軍事的奉仕をめぐる、土地の授受を媒介に結ばれた私的な主従關係の社会組織——が国家に代つて社会の秩序維持の任にあたる、即ち社会組織が政治組織たるの性格をおびてくるという現象は、中世の成立として、世界史的に歴史的位置をあたえられるであらう。そこ

で、この現象はまた、「古代封建制」にたいし、中世封建制を考えるにさいしての一指標となりえよう。中世封建制度は古代末期の、政治的に、社会的に分裂し混乱した不安定、不確実な状態を脱して安定を得ようとする要求から生れたものである。当時の社会においては生命、財産をもつとも安固に保障し得たものは武力であつたから封建制度は武士を中心に打ちたてられたのであるが、当時における武士はあらたな生産力の主体であり、彼等はあらたな生産力の体现者として、古代という旧秩序を破壊し、封建制という当時における進歩的な社会体制をつくりあげたのである。

わが国における中世の成立に重大な転換期をなす十世紀初めは、丁度、中国の古代から中世への移行の時期とされる。しかし、莊園の発達した宋代以後には、主権の分割、地方割拠的な政治形態はおこなわれなかつた。中国に典型的な封建制をもつ中世が生れなかつたことの解明は、やはり中国における領主^①地主、土豪劣紳といわれるものの構造に求められるのではないかと考えられる。中国の地主^②領主階級と、その下の直接生産者^③農民との対立が共同的なものの、その他種々の歴史的事情の故に、新しい中世をつくり出す発展を生みださなかつたものと考えられる。(の)しかし、マルクスの次の言葉は、われわれに一つの示唆をあたえてくれる。「もし、土地所有者たると同時に、主権者たるものとして、彼等に、直接対立するものが、私的土地所有者でなく、アジアのように国家だとすれば、地代と租税は一致する……国家はこの場合、最高の地主である。主権なるものはこのばあい、国家的規模で集積された土地所有である。だがそのばあいには、かかる土地所有者にかわる私的土地所有なるものは実存しない。——といつても、土地の私的ならびに、共同的な占有および用役は実存するのだが」(の)専制君主制の支配が強固で、共同的なもの、ねづよく残存する場合、中世において、主権の分割はおこなわれず、国家的規模で専制君主制が行われるという中世の一つの様相を考えることが出来るように思われる。

次に、氏のいわれる「封建的ヒエラルキーは農奴制とは異質のもの」であること、即ち武士相互の結合関係と武士^④領主と農民との結合関係が質的に異なつてゐることについて、私は前に次のように考えた。(の)領主と農民との関係は、根本的には家産制(Patrimonialismus, od. Patrimoniale Herrschaft)であり、そのような結合関係の中に武士相互の結合関係の様式が社会的強制力によつて、武士^⑤領主階級の側から、混入、附加されたものではないだろうか。家父長制に由来すると考えられる家産制的な関係の中へ武士階級の結合関係が強制される。そこで農民間に「封

建制的ヒエラルキー」の形成がおこなわれることは、領主の支配に従属する村落共同体として、領主制支配の手段として農民の共同体関係が利用されるような状態に、農村共同体があつたということを意味するものであらう。このことは血族擬制的な結合関係の弛緩が考えられるとともに、中世という時代の特徴が示される意味で古代における領主と農民との支配従属関係と中世におけるそれとを区別する一指標となり得よう。

註(1) 前掲、大塚久雄氏、「所謂『封建的』の科学的反省」一六九頁、以下

註(2) 江頭恒治氏「封建制度とは何か」産根論叢二十六号十二月、三頁

註(3) 安村氏は、この「血縁的原理」による区別をあげられながら、さらに別に区別の標識をもとめられる。即ち「むしろ領主制とか、血族擬制支配とかを区別せず、両者に共通な一方的実力的支配関係が上部構造と下部構造とを結びつけると考えたらどうであらうか。そしてこの場には古代封建制と、中世封建制とは共に特権の土地所有関係として、統合され、両者を区別するにはその特権の差異ということよりも更に別の標識がほしくなってくる。」安村氏、五二頁

註(4)(5) 鈴木成高氏「封建社会の研究」四七頁、五三頁

註(6) 前掲、江頭恒治氏、六、七、十三頁

註(7) 石母田正氏「中世成立史の三三の問題」(日本社会の史的究明)所收。三九—四三頁

註(8) Marx, Das Kapital, herausgegeben v. Engels, Bd III / 2., 12. Aufl 1934. S. 842. 長谷部訳(青木文庫版)一一一四頁

註(9) 「封建的なものについての一考察」(経営と経済)三十三ノ二、八七頁

(三)

およそ歴史の流れを段階にながめる時「一方では新しい環境の下で古い生産活動が維持又は継続せられ、他方では新しい生産活動によつて古い環境が破壊せられつつある」(マルクス)というのは歴史的發展段階における経済的にはさけられない現実の姿であらう。さらにいま、われわれは封建制度を考察せんとするに際し、以下の事を充分に意識

しなければならぬ。即ち「封建制度とは社会的にも政治的にも、一定の時期に完全なる形態において、具現したものではなく、従つて封建制度という言葉は数世紀にわたる歴史上の広範圍の事實に対してこれらを包括的に表現するために与えられた莫然且つ簡潔な言葉である」ということである⁽¹⁾。したがつて封建制度、封建組織は實現した制度としてではなく、中世史を一貫して流れる諸傾向として眺められねばならないのであつて、「封建制度」とはかかるものである故に制度という言葉によつて示されるような確立した状態を考へてはならない⁽²⁾のである。それにもかかわらず、このような現實を前に、われわれはいわゆる思维的に整序された極限概念としての理想像にあてはめて、その特殊歴史的な性格を認識しようとするところみなければならない。何故なれば、このような方法によつてつくりあげられた理想像・理想型がただしものであるとなら、われわれはあたえられた現實態が封建制度というにふさわしいものかどうかをたしかめることが出来るのではないかと考へるからである。そこで中世封建社会の姿を典型的に、理想型的に靜態において考へることは、現在一応許されていいのではないかと考へる。

まづ封建社会という場合、それはその構造的性質としていわゆる封建制度が一般的に支配的組織形態としておこなわれている社会のことであり、一つの發展段階として傾向的に、類型的に把握された概念であることは異論のないところであらう。また、ヨーロッパ中世の封建制度やわが国の封建制度⁽³⁾にはいづれも、武士の軍事的奉仕をめぐつて結ばれた主従關係のヒエラルキーが構成されていたことも、さらにそこでは農民が、武士の領主の支配の下に農奴・隸農といわれるにふさわしい状態で存在しておつたこともまた異論のないところであらう。いまここで、歴史發展段階におけるこれらの中世封建社会から、その特徴的な事實・現象をとりだして封建制度を考へていこう。

封建社会において、政治的にもつとも特徴的な事實は武士階級による政治權力・政治機構の把握であつた。武士階級の政治的權力把握の經濟的基礎はいうまでもなくその土地所有である。武士の所有する土地は「封土」Fendumとして彼の上級の武士からあたえられたものである。この「封土」を媒介に、軍事的奉仕をめぐつて結ばれた主従關係という私的な社会關係が組織化され、その頂点に国王をいたたくヒエラルキーを構成しつつ、そのまま公的制度としての政治制度となつてゐる。即ち武士は各自、自己の保有地の上に公權力的な權力を保持しており、自己の保有地

の秩序を維持し、それが全国的に綜合されて、社会の秩序が維持される場合、公的制度としての封建制度がある。武士は支配階級として社会の表面にその姿をあらわし、まづ自己の保有地の上に、やがて全国的な規模で、自己本位の社会体制をつくりあげる。したがつて武士は自己の保有地の上にただ単なる地主（近代的意味での）としてではなく、いわゆる領主として、主権者として、専制君主然として君臨する。そこで、武士の保有地（莊園、領地）は経済的に「土地收盆の大部分が直接もしくは間接にもつばら地主にのみ歸属するように組織せられた土地」⁽⁴⁾であり、それ自身、一つの社会機構であり、政治機構である。そこで、武士は自己の保有地から、土地收盆を確保するために莊園居住者「領民にたいし、生産活動から消費生活にいたるまで、公権力的に経済外強制を行使し得る。また、このような封建社会において武士は、武士階級という支配階級として固定化されるとき、優越せる身分として庶民にたいしうることも考えられよう。

封建社会の成立期においては、武士は混乱した社会秩序の維持者として、それ自身、一つの使命と任務をもつて登場し、また、その秩序維持の任務を果たしたのであらう。彼等は、社会における支配階級として、自己を確立するや否や、農民にたいする搾取階級としての自己をみいだすであらう。いま、ここでとりあつてゐるのは、武士が支配階級として、自己を定立した段階であることはいふまでもない。

武士の支配下に、農民は家族経営規模の小土地を分与せられ、自己の計劃において、自己の「生産手段」をもつて経営に従事する。そして肉体的・物質的貢納を領主に提供する。この関係は、農民が安心して経営に従事し、生計をたてているのは武士のおかげであるとして、即ち保護、被保護の関係として、しばしば武士の社会組織における御恩と奉公の関係を擬せられると考えられるのであつて、それは公的な権利義務の關係としてあらわれる。地代は全剰余に迄、及びうるし、農民の土地にたいする關係は、近代的意味の用役権か、占有権か、または所有権に近いものかは、領主「土地所有者の」権力「の強弱の度合い」かんによつて考える以外にはない。土地所有者が自己の保有地において、公権力的な権力を行使し、政治的に、身分制的に強制を發動しうるような状態においては、農民は「土地の附屬物」「土地つきの生産の要具」としかみられないような状態に迄達しうる。農民のこのような状態には、彼等

がきわめて低度の生産力のために、又、領主権力に対抗するため等によつて、共同体結合をおこなっていること、それに対応して農民の意識がきわめて低いことが前提されねばならないことは周知のことであろう。

しかし、古代から存続している農民の協働組織、村落共同体は、中世において、古代における共同体とは質的にことなつたものとなつてゐる。まづ中世共同体は、古代における共同体の結合關係の組帯をなす、民族的、家父長制的又は族团的なものから、より、地縁的結合關係の意味がつよくなつてゐる、さらに中世における村落共同体は、領主の支配機構として、共同体の内部にまで領主権力が浸透してゐると考えられる。共同体組織にともなう団体的束縛、共同体規制は領主制支配に都合のいいようにつくりかえられ、修飾、限定され、またあらたにつくり出されたりしてゐるであらう。領地、莊園として、村落共同体は、全体として、共同体農民の自給自足的な経済機構であると同時に、領主の経済機構でもある。領主の支配は、單に、共同体の外部のみでなく、内部にまで浸透し、消費生活そのものまでも、拘束しうるようになってゐる。(6)そこで共同体規則は、本来の意味での、封建社会における経済外強制とからみあつて、封建社会的に修飾、限定され、領主制支配の要具となり、経済外強制として、作用してゐると考えられる。

封建社会には、それにふさわしい、ものの考え方が生れる、封建意識といわれるが、それは封建社会固有のものではなくとも、封建社会において、もつとも支配的となり、そして特徴的な意識までも、ふくめてよいと思う。ものの考え方なるものは、生産様式、生活様式に対応するものと考えられるからである。古代から存在したものの考え方が、封建社会において、その社会を特徴づけるように、もつとも、支配的に、顯著にあらわれた社会意識は、封建意識と考えてよいと思う。たとえば報恩思想は、決して中世特有のものではなく、原始から存在したものであるが、封建時代において、武士の主従關係に強調され、開花したと考えられる、封建社会にふさわしいものの考え方、又、封建的精神とよばれるものには、武士道、恩義、伝統などの尊重である。の桜井庄太郎氏があげられるわが国における封建意識としては、主従關係にもとづくものとして、恩、忠節、名(名を重んず)恥(恥を忌む)死(死をおそれぬ)、分限、小欲知足、儉約などである。さらに主従關係に関連する社会意識として被支配者階級の一分、義理、分限思想に関連するものとして儉約、廉潔、あきらめ、宿命観、忍従、同じく、忠、奉公については、孝、貞、「道理」「天道」、又徳川時代の家業意識などである、もともと、主従關係にもとづいて、発生した社会意識が、武士の主従關係だけでなく、武士の家族關係から、やがて、被支配階級の間にまで波及したことが注意されるべきである。(8)なお、西川達雄

氏は、封建道徳を、次のように要約される。(イ)封建社会を維持するに都合のよい道徳である。(ロ)身分性、主従拘束性をもつた不合理な秩序を正当化しようとする道徳である。(ハ)それは極めて権力的で利己的で、卑屈な非人間的な道徳である。(ニ)形式的で封鎖的である。(ホ)個人を媒介とせない協同体の縦の道徳である。(9)

すでにみたように、武士と武士(領主と領主)の關係をつくりだしたものは土地であつた。また土地所有者「武士と農民との關係はいふまでもなく、土地所有關係である。当時において、農業が、社会の決定的な、支配的な産業であつたことは、土地を決定的な生産手段たらしめた。そこで土地所有が封建社会の構成を規制するものになつたことは当然である。したがつて武士は土地所有——当時における私有財産の一般的様式——によつて政治的權力を掌握し得たのである。まことに封建社会の土台だつたのは土地所有であつた。即ち、封建社会における土地所有關係は、ただちにそのまゝ政治的關係としてあらわれ、政治形態となるところに、「領主権と土地所有との合成」⁽¹⁰⁾がしめされるところに特色がみいだされわしいかと考える。そこで、封建制を單純に政治形態とすることは勿論許されないが、⁽¹¹⁾封建社会における土地所有という事実を、ただちに「公的權力」とむすびつけて考えねばならぬとすれば、われわれが封建制というとき、ただちに政治機構を思ひうかべねばならないのではないかと思う。しかしわれわれは封建社会における土地所有について、それが歴史的な生産力の發展段階に即して考えられねばならないこと、即ち封建社会における土地所有とは「人間が自然的群集的存在物であつた限りににおける私有財産の一般的存在様式」⁽¹²⁾であつたことを忘れてはならない。

註(1)(2)矢口孝次郎氏「イギリス封建社会經濟史」五、六頁

註(3)

わが国における封建制は、或いみでは明瞭に封建社会のク像々をしめすものではないかとも考えられる、たとえば、マルクスは「日本は、その土地所有の純粹封建的組織と、その發達した小農民経営とをもつて、たいていはブルジョアの偏見によつて口授された吾々の歴史書全部よりも、ヨーロッパ中世の遙かに忠実な像を提供する」「資本論」長谷部訳(青木文庫版)一〇九八頁、註、また、ウェルズは江戸時代の日本社会をさして「絵のような封建制」(picturesque feudalism)と云つた。H. G. Wells, *The Outline of the History*, 1920, P. 544

註(4) 鈴木成高氏「封建社会の研究」三七八頁

註(5) 保護、被保護の關係は、家父長制的な關係、家産制的な關係にみられる。

註(6) 旗田巍氏「中国社会の封建制」(「封建遺制」所收)二三九—一四三頁

註(7) 堀記保藏氏「経済史入門」一四五頁

註(8) 桜井庄太郎氏「日本封建社会意識論」二二六頁、一三六頁、二四〇頁をみられたい。

註(9) 西川達雄氏「封建道徳」「彦根論叢」二十八年二月、八四頁

註(10) マルクス、エンゲルス全集二七巻「経済学にかんする手稿」二二七頁

註(11) 封建制を政治形態をあらわすものと考えらるならば、それに対するものは資本制ではなく、われわれの用語では民主制であらう。この場合、資本制に対するものは、領主制「莊園制」ないし「地主制」といふべきであらうか。

註(12) 湯村武人氏「土地所有と資本」「経済学研究」第十四巻二号、一二八頁

(四)

以上、封建制を歴史的に位置づけ、封建制を規定するに際しての、二三の困難な問題を指摘し、少しく封建制の構造的な性格を考えたのである、次に安村氏の「わが国封建制度の特徴」の頃から問題になる点をとりあげ、日本封建制の特徴を考えていこう。

氏はいわれる。「古代と中世との二つの封建的なものがかなりはつきりと重なつて存続したところにわが国のいわゆる封建制の特徴が見られるわけである。」(安村氏、五四頁)氏のいわれる「古代の封建制」がさきに考えたようなものであるとするならば、ここで「古代の封建制」といつておられる氏の意識の中には、おそらく氏族遺制的な、血族擬制的なものがあるのではないかと考えられる。たとえば、「わが国におけるように古代あるいはそれ以前に起源をもつ氏族遺制的な、もしくは血族擬制的な支配關係が中世の領主制支配に利用されたばかりでなく……」(安村氏五四頁)といつて居られる点、また「わが国に残存する二重の封建性が封建的生産關係や封建制度、そのものを指す

ものでないことはいうまでもない。それは主として社会諸関係や意識の面に見られる人間的従属関係や身分的關係の遺制を意味するものであつて、そのような關係は古代あるいは原始時代から存在したものが、本来の封建制を経過しながらも残存し、ある場合にはそのことによつてかえつて強化されたのであるといわれる。「二重の」という修飾語もこの意味で用いたのである。」(安村氏五六頁)といわれる点から考られる。「古代封建制」といわれるものをその史的位置と血縁擬制的結合の度合いにかんによつて、中世封建制と一応、區別してかかるならば、氏のいわれる「古代封建制」はこの際、氏族遺制、血縁擬制の關係ともいわれるものに解消出来るのではないかと考える。換言すれば、ここで「古代封建制」は民族的、家父長制的、血縁擬制的なものといひかえることが出来るのではないかと考える。さうすれば、わが国の封建制度は、氏族遺制的なもの、家父長制的なもの、血縁擬制的なものがその結合關係に根づよくからみついていたといひかえることが出来るであらう。この点にかんしては、すでに、堀江保藏教授が、わが国民生活構造の中に歴史的につぬかれる「家的な」ものの存在を指摘しておられる。(1)教授はわが国の封建制度の特色として「(イ)封建領主の支配權が殆んど絶対的といつてもよいほど強力であつたこと。(ロ)市民社会の成長がまだけられたこと。(ハ)右の二点に於て、家的な構造をもつ国民生活の維持存続に寄与するところがすこぶる大であつたが更に封建制度そのものが国民生活構造の封建的顯現形態に外ならなかつたこと。」(2)をあげておられる。かつて氏族制度にその源を發する家的な結合關係は吾が国の歴史をつらぬく国民生活構造として国家的規模に迄高められ、国民的範圍にまで拡大され、その顯現形態とまでみられる強力な權力をもつ封建制度を生んだと考えられる。このように考えるならば、わが国の封建組織の結合關係には氏族遺制的なもの、血縁擬制的なものが根づよくからみあつていたことは容易に考えられるであらう。

そこでさきに安村氏が「古代封建制」と「中世封建制」との「差異」を一応「血縁的原理」にもとづくものにもとめられたことの意味が、ここでも了解せられる。このことは逆に、中世封建社会の下部構造としての村落共同体にも、さらには上部構造においても、血縁的、氏族遺制的な結合關係が古代に比較して弛緩していることをしめすものであらう。

しかしながら、わが国の封建制度に氏族遺制的なもの、血族擬制的なものが色濃くからみあつてゐるという見解の方向は、現在、わが国の農村における非近代的社會關係、封建遺制を考察する際に極めて重要である。さきの堀江保藏教授、また中村吉治教授の一連の指摘⁽³⁾からもうかがわれるように、わが国の國民生活の歴史には、血族擬制的、さらには、同族的な結合規範がたどられるのであり、それは現在のわが國の社會生活の構造にまで、残存していると考えられる。⁽⁴⁾それは日本社會が、家族的な構成をとるといわれたり⁽⁵⁾また現実の農村において、同族的結合關係が基本的性格⁽⁶⁾として考えられることにかがわれよう。この氏族制的なものの伝統が現在の農村の社會關係にいかなる意味をもつてゐるかは、現在における農村共同體を考えるにさいして重要であらう。

註(1)(2)堀江保藏氏「歴史的に見たわが國民生活構造」人文、二卷二号、六七頁

註(3)中村吉治氏の「日本社會史概説」は氏族時代から、近代社會の形成にいたるまで「氏族的なもの」、「同族的なもの」

の流れが日本社會の結合規範としてつらぬかれてゐることをたしかめうらうと思う。

註(4)わが國の近代社會の成立にさいして、「氏族的なもの」の残存するにいたることは、前掲中村氏、第四章參照、又前掲、堀江教授、七三、四頁よりも考えられる。

註(5)川島武宣氏「日本社會の家族的構成」(一)、家族制度と日本の社會

註(6)福武直氏「日本農村の社會的性格」四六頁

(五)

中世封建制を歴史の發段段階に位置づけながら極めて大づかみではあるが、やゝ抱括的に考察してきた、上述の封建制の構造にたいする考察をもとに、農地改革後の日本農村において、封建的といわれる生産關係、社會關係を考えてみると、まづ独占段階の資本制下に、中世におけるような封建制度——國家的な規模で政治制度としてあらわれた古典的な形態の封建制度——があらわに支配しているということは、当然、いえないしたが、封建制が支配していると思われる現象の上にもわれわれは「半封建」ないし、「封建的」という用語をつかわなければならぬようにな

つてゐる。何故ならば、いうまでもなく、資本制社会において土地は社会における唯一の、そして主要な生産手段ではない。したがつていかに封建制が根づよく残存してゐるとしても、生産のしたがつて全社会生活の支配者は決して土地所有者ではありえない。(1)しかも、資本は土地所有にたいして自己に適應した形態をおしつけずにはおかぬ。(2)そこで資本制社会において、土地所有者は、少くとも資本の運動とともに、資本の運動法則に従つて行動しなければならぬことはあきらかであらう。そこで資本制社会の中におかれてゐる封建制という意味でまづ、「半封建制」という用語がつかわれる意味が考えられる。(3)したがつてこの「半封建制」は封建社会の遺制であるとしても、資本制社会の中で、現実には作用し、〃生きてゐる封建制〃を指すのであると考えられる。しかしながら、われわれの用語で「封建的」という場合は、極めて莫然とした意味内容をもつと考えられるが、いまかりにここでは〃封建社会的〃という意味の形容詞として使用し、考へて行きたいと思う。(4)

今日、わが国における農業経営が已然として、小経営にとどまつてゐることは周知のことであらう。またわが国の農業が、總じて水田経営を基幹とする極めて低位な技術段階に位し、今なお同体的結合をのこしてゐることもまた、異論のないところであらう。したがつてまた、農民が小土地、生産手段を私有し、家族労働を主とする経営をおこなつてゐるという意味で、生産様式が封建的であるとはいはうであらう。いま、わが国の小経営農民を資本制下の小農としても、資本制下の小農民のあり得べき状態(5)により、農村に非近代的な思想、感情、慣行——非近代的とは封建的ということと、ともに、古代的なという意味もふくめて——が残存してきた経済的基盤は考えられる。周知のように、農地改革に際し、一町歩限度の保有貸付地が定められ、しかも、山林、水利が、未開放のまままでのこされた。このような農村において、農業外へのエムプロイメントが小さければ、小さいほど、土地は主要な生産手段となるであらう。そこで地主、小作の關係においては、もちろん山林所有、水利権の欠如のために地主に依存せねばならない自作農も、生産手段の所有者としての地主に従属せねばならないようになるであらう。そこには、思想、感情、慣行としての封建的なものが資本主義社会の経済法則の貫徹をさまたげる方向に影響し、地主にたいする小作農の關係はいうまでもなく、自作農にたいする關係にも、封建的・非近代的な支配の色彩をまつわりつかせることも考

えられる。しかし、この地主の、封建支配とみえる、支配関係の基本となつてゐるものは、窮局においては、資本制社会の経済法則に他ならない。そこで農村の諸社会関係に残存する非近代的なものの本質はなにかと考えるためには、村落共同体組織——地縁的・血族擬制的な村落共同体、また家的共同体の組織——がとりあつかわれねばならぬであろう。⁽⁶⁾

ところで資本制社会の中におかれて居り、現実には生きてゐるという意味で「半封建制」を考えるならば地主、小作、または自作との関係は、基本的に、封建社会における生産関係でなければならぬ。しかし地主—小作の関係にも資本主義の経済法則がある程度、入りこんでいると考えねばならないから、その生産関係、社会関係には資本制的な関係と、封建支配の関係との、いづれが基本的につらぬかれてゐるかが農村における「封建遺制」の解明への楔となるであろう。そこで、土地所有関係の経済的表現としての地代を基本的につらぬくものは何か、地代、小作料は一体、何を物語るかということも、一つの問題となりうるであろう。また、すでに考えたように封建社会における生産関係、土地所有関係は、そのまま、ただちに政治関係となるものであるが、わが国の国家機構の中に地主の階級としての権力がいかにつらぬかれてゐるかが説明されねばならない。即ち部落、村落、県さらには国家機構へと一連の地主権力の系路をたどり、それが独占資本の権力機構にたいして、いかなる力関係にあるかが検証されねばならない。もし国家的規模において地主権力の伸長がたどられたとしても、その独占資本の要請が地主勢力を温存したというのであれば、当然独占資本の優位をしめすものであり、⁽⁷⁾土地所有の従属を示すものでなければならぬ。とするならば「半封建制」というのは、独占資本に従属し、農村に於て支配力をふるう⁽⁸⁾「地主制」といわれるものであるうか。しかし、いわれる「地主制」とは、土地、生産手段の所有者としての地主が資本制社会のなかにおいてもある程度の権力、経済的権力をもつというだけではなく、直接的生産者にたいし、封建的な支配力をもつものであるという意味のようである。(われわれは、ここで「地主制」というとき、われわれの考察の方向はすでに封建社会の下部構造に重点が大きく移行してきたようである)

「地主制」の内容、地主と農民との関係が、封建的であり、地主の農村支配がいわれるとき、われわれは二つの意味

で農村における共同体組織が究明されねばならない。

一つは、土地所有者と直接生産者との関係、農村の諸社会関係が封建的であるといわれるとき、かつての封建制下において、土地所有者と農民の関係は基本的には家産制であつたと考えられることである。わが国における農村の社会関係に、家父長制的なものが残存し、家族制度的なもの、同族的なものが残存すると指摘されるにさいし、共同体組織の究明は農村における社会関係、生産関係にのこつていとされる非近代的なものの解明になにほどこ、役立つであらう。

さらにいうまでもなく、水と山の支配が未開放のままに地主の手中にのこつていとされるとされるわが国農村において、共同体的規制——かつては封建社会の経済外強制とからみあい、その重要な部分となつていたと考えられる——はいかなる役割を演じているかが、説明されねばならないからである。

以上、極めて粗雑に、資本制下に残存するといわれる「半封建制」を考えるにさいしての疑問を呈出した。しかし資本制下に地主が土地所有者としていかなる意味をもつか「封建遺制」、「半封建制」の解明には村落共同体の構造の研究がいかなる意味をもつかが少しく了解せられるであらう。

註(1) 大島清氏「農業における生産関係と土地所有」『経済志林』十八卷二号、五八頁

註(2) 同、一五七頁。

註(3) 「半封建制」の「半」がなにをいみするか、あるいは、ただ「枕詞のように意味のないもの」上屋喬雄氏、日本資本主義史論集一九四七年九七頁または、過渡的なものを意味することもあるようであるが、ここではただ古典的な封建制のいみをもたないというように解しておく。

註(4) 第一に封建社会というように、中世の社会構成全体をひつくるめてもいいうるであらうし、第二は、土地関係に基礎を身分的隷属関係もいいうるかと思えば、封建社会において、その中におかれたことにより、潤色され、限定をうけた社会関係、生産関係、意識、觀念形態の上にも冠せられるように思われる。(拙稿、前掲、八八頁)

註(5) 大島清氏「農業問題序説」第二章、また、阿部矢二氏「資本主義社会における小農経営」『立命館経済学第一巻四号』参照

註(6)

いうまでもなく、共同体組織(家共同体的なもの、家族制度的なものをもふくめて)は、あらゆる、非近代的なものの温床と考えられるからである。

註(7)

いま、かりに「地主」を問題として、考えているか、資本制社会に地主が存在し、彼等が土地所有者として、なんらかの經濟的力をもつことは当然である。資本制社会に土地所有者が存在するということが、封建遺制の存在をしめすのでなくて、問題は土地所有が社会の構成、生産關係にします作用であることも当然であろう。しかし、土地所有そのものが封建的である(例えば小池基之氏、「土地所有と封建遺制」「封建遺制」二七頁以下、又、向坂迺郎氏「日本資本主義の諸問題二二八頁」というならば問題は別であるが、それにたいしては、大島氏前掲八二頁をみられたい。

註(8)

たとえば、日本資本主義講座五卷「農地改革と半封建制」の一連の敘述からも政治的な独占資本の優位は考えられよう

註(9)

たとえば渡辺洋三氏、「日本における前近代的土地所有の諸類型とその支配關係」「思想」一九五四年、三月、四月